
Diamond dust

龍火リュネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D i a m o n d d u s t

【Nコード】

N 2 6 9 7 B

【作者名】

龍火リユネ

【あらすじ】

七年前起きた事件、襲撃され消えた一族「風の民」、今、世界に何か起きている・・・

プロローグ

8年前の事だ

ダイヤモンドダストが舞い散っていた夜の事

その光景は私から見ると美しく儚い物だった

それはこの世界に「暖かさ」と言うものが無いと言う象徴でもあるように全世界に舞い散った

私は友人とある町に旅行へ行っていた

ダイヤモンドダストが散っている夜の光景

友と見たその光景を私は一生忘れないであろう

その日、この世に事件が起きたのだ

魔力動戦艦が町を襲った

雪鳥が一斉に飛び

私たちの視界は赤く染まった

町のすべてが赤く染まった

私たちは逃げた

精一杯の力を出して

この町の外へと出たのだ

だが町の者たちは戦った

この町を、この風の民の町を壊されないようにと

だが力は魔力動戦艦には及ばなかった

風の力は消滅し、翌日になると跡形もなくなっていた

風の民に生き残りは居なかっただろう

その時からだろうか？私が騎士になると決心したのは

私たちはその場を後にした

―それから、私たちは別の道を歩んだ

友はその3年後消息不明になり私の前に姿を現さなくなった

第一章 再開

253年2月9日

それはその事件があったちょうど8年後の事

今現在である

クリスタルガーディアンズ

私は『水晶騎士団』の団長になり『幻影盗賊団』ヴィジョンシーファスを追っていた

私はそのボスを殺すという使命を持っており盗賊団のアジトを探している

「風の民の生き残りを探す」事に命を懸けていて、これは独自に調査をしているのだ

それと、5年前行方不明になった私の友人の事も調べている

こちらの2つは全くと云っていいほど手がかりが無く途方に暮れている

水晶騎士団の本拠地の廊下を歩いていると突然私の事を呼ぶ声があった

「サタンネイル団長！」

「なんだ、リユアス一等兵」

「幻影盗賊団のアジトが分かりました」

「本当か！？」

「この場所から南に位置する町にある洞窟らしいです、割と近くですよ、あの盗賊団は割とすぐにアジトを変えるらしいですがそこには昨日来たばかりらしいので大丈夫だと。」

「そうか・・・で洞窟は？」

「・・・私なりに少し同様しているのだろうか・・・言葉がおかしい気がする

長い間追っていた盗賊団だ、それでもおかしくは無いだろう

「ええ、盗賊団が来るまで恐がって誰一人も近づかなかつたらしいですよ、魔物が棲んでいるとかで」

「魔物か・・・だが今の幻影盗賊団の居場所はそこなら明日、出陣す

るぞ」

この日の夜

私は窓から外を見上げた

8年前のようにダイヤモンドダストが舞い散っていた

あの時の魔力動戦艦はなんだったのだろうか？

あの時私は逃げてよかったのだろうか？

あの時の事をすべて覚えていなければいけないのだろうか？

私はその事ばかり考えていて明日の事など考えられもなかった

私、アルト・サタンネイルは愚かな人間だ

自分でそう思い、私は眠りについた

翌日、私達、水晶騎士団は幻影盗賊団のアジトへ向かった

洞窟は広い訳ではないし、無駄犠牲を出したくはない

騎士団の中の特に優秀な一等兵達と団長の私で行った

ざっと20人程度だろうか

恐らく相手の数もそのぐらいだろうが特に強いのはその中のボスとボスの御付の人二人だけらしい

死ぬかもしれない戦いだが生ぬ覚悟も自分はあるのだろうか

アジトの中へ入ると、そこは例えるなら魔界の用にどす黒く恐怖があふれていた

これなら町の人近づかない理由も分かる

盗賊団の下っ端らしき人物達が堂々と入ってきている私達を睨んでいるが手を出してこない

格の違いがわかるのだろう、睨みながらも腰がひけている

相手が手をだして来ないので想像よりも遥かに早くボスの所の前までたどり着けた

そこにはボスの御付の二人と下っ端の中で強いほうの人が集められていた

「かれ！」

私が指示を出すと騎士団の者たちは即座にその人達に襲い掛かったその時だった、微かにボスの所まで行ける道が開かれた

「サタンネイル団長！今のうちです！」

「分かった！負けるなよ」

それに気づいた御付の片方がその道を塞いだがりユアス一等兵がそれを押し倒した

「早く行ってください！」

「ああ、済まない」

私はリユアス一等兵が開けてくれた道を全力で走りぬいたボスの部屋の前には扉があり

洞窟なのにそこだけ木製の部屋になっていた

バンツ！とすごい音を発てて扉を開けると、そこにはソファが一つ置いてあり壁の色が青などで彩色してあった

いかにも女の子らしい人形なども置いてあり

そのソファの上には女性が一人どさつと腰掛けていた

「あら、以外に早くここまで来たわね」

何処かで聞いた事のある声で私に話しかけるとソファから下りて私の近くに歩いてきた

「貴方・・アルト・サタンネイルでしょ？」

「何故名前を知っている」

「そりゃそうよ、貴方まで有名になるとだれでも知ってるわ、それに、すぐく有名な騎士団でしょ？いつかは来ると思ってたわ」

やはり・・何処かで聞いた事のある声
懐かしい感じがする

「貴様、名はなんと言っ

「あれ？覚えてないの？」

私はその一言で驚きと焦り、それと悲しみが生まれた

彼女は私の幼馴染、ソプラノ・ダークサイドだった

「あたしよ、あたし、ソプラノよ？」

「っ・・・！何で・・・何でお前が幻影盗賊団に・・・」

「5年前、私はこの弱小盗賊団をみつけたのよ、今だからこそ強いらしいけどね、その頃、私は風の民の生き残りが居るがどうか調べたくてね、銃の腕も良かったし、ここの元、ボスをぶっ倒してボスになったのよ、そんで調べてた、今私が持っている情報は沢山あるわ、私の事殺したら全部分かなくなるわよ？」

「・・・だが捕まってもらうぞ」

「ええ、それは良いわよ、私アルトに手を出そうとは思わないし、この生活にもある程度慣れてきたけどここの盗賊団には飽きたわ」ソプラノがそういった時

部屋の扉が開きリュース一等兵達が入ってきた

先ほどの戦闘で命を落としたのだらう、数人足りない

「サタンネイル団長・・・その人がここのボスですか？」

「ああ、そうだ」

「じゃあここで殺した方が良いのでは」

「駄目だ、今、こいつしか分からない情報がある、それを聞き出すまで殺しては駄目だ」

本当は殺したくない、という感情があり殺せないだけかもしれないだが今ソプラノを殺すと情報が無くなり何も出来なくなるのは確かだった

私はソプラノに抵抗できないように手錠をはめ、そこについた鎖を引っ張らないようにして歩いた

水晶騎士団の本拠地に着くとソプラノは抵抗しないと考え手錠をはずされた

リュースなどの兵士は少々不満そうにしていたが、しばらくして抵

抗をせずにいろんな事を淡々と話すソプラノの姿を見て不満も無くなつたみたいだった

「・・・これで盗賊団の話はある程度終わりか」

「そうね」

「で・・・風の民について話を聞いて良いか？」

「ええ、今、風の民は私の所とは違う盗賊団に所属しているわ、たしかボスでは無かったけど・・・かなり上の地位に居るみたい」

「まあ・・・あの事件があつた時に逃がされたのは恐らく赤子か子供ぐらいだろう、生き残るにはそのぐらいしないと駄目だろうな」

「名前も分かつてる、ルクス・ラグナロクだったと思つて、年は今16～17歳ぐらいかしらね」

私で調べられなかった情報をソプラノは沢山持っていた

流石に盗賊と騎士の違いだろうか、裏の世界で動いたほうが情報が遥かに多いに決まっているだろう

「ああ、有難う」

「サタンネイル団長、こいつの処分は？」

「しばらくは私の手足となつてもらつ、処分はその後でも良いだろう」

「はっ！」

その言葉を聞くと兵士は部屋から出て行った

扉のボタン、言う音がするとソプラノは口を開いた

「とりあえず水晶騎士団の一員になつたけど・・・私、結局殺されるのよねえ」

ソプラノは笑いながらそう言ったが顔に笑顔は無く私の顔を直視していた

「ああ、恐らくな・・・」

同じく、私の顔にも笑顔は無かつただろう

友人がいつか殺されるという不安を抱きながらこれから共に行動するとなると辛いところもあるだろう

ここは一時的でも友人が牢に入るのを・いや、命を落とすのを免れたのを喜ぶしかないであろう

私がソプラノの言葉に答えた時点から会話が無く時間だけが無駄に過ぎて行った

二十分、三十分は経っただろうか

リュアスからの伝言があり、騎士団でも少し調べていた風の民についての捜査がこれから主な仕事になる、と決定されたらしい

私からの願い、風の民について調べる事を上に届けたのも効果があつたのだらう

調査はこれから一週間後、それまで休みが無かったので特別休暇が殆ど騎士団全員に下りた

私も明日から休みだ、この一週間を大切に過ごそうと思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2697b/>

Diamond dust

2011年1月13日14時06分発行